

子どもの発達にとって町とは何か —ピストイアの保育における環境としての町—

City , Early Childhood Education, and Child Development :
A Case of Pistoia, Italy

*星 三和子
Miwako HOSHI

**上垣内伸子
Nobuko KAMIGAICH

1. 子どもの発達と環境

社会と切り離された抽象的な子どもなど存在せず、それぞれが固有の社会・文化・時代の文脈のなかで発達することが認識されて以来、発達における環境の意味は発達心理学の大きなテーマの一つである。Bronfenbrenner (1979) の生態学的システムや、Super & Harkness (1986) の発達のニッチの理論は、子どもが直接関わる環境から影響を受けるだけでなく、環境に働きかけることの重要性を主張している。しかし、直接関わるごく身近な環境を除けば、子どもは環境そのものを作りだすにはあまりにも力のない存在である。Bronfenbrenner 理論でいえば、マイクロシステムからマクロシステムまで、おもに環境を作り用意しているのは先人を含む大人である。したがって、ここからは、子どもに対して大人はどのような環境を提供すべきかという議論が生まれる。

一方、最近の発達心理学には、周囲との相互作用を間主観的なレベル、つまり環境との関係性そのものを対象とする視点がある。つまり、子どもと周りの人々、子どもと周りの物理的な環境、子どもと園や学校、子どもと地域、子どもと社会の関係は何を作り出すのか、何が生み出されるのが好ましいのかを問う視点である。物理的な環境ですら人の外に恒常的に存在する訳ではなく、「持続可能な環境」は努力によって作りださねばならない今日的な情況もこの考えを後押ししているといえよう。また幼児教育・保育の分野でも、今日の社会状況のなかでの新しいパラダイムとして、社会化される子どもではなく、社会と相互に関わりつつ社会を構築していく主体としての子ども像が出されている (Brougère & Vandenbroeck, 2007)。

* 十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

** 十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科

Department of Human Developmental Psychology / Early Childhood and Elementary Education,
Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：発達、保育、イタリア、環境

このようなことは、理論としては語られ得るが、教育実践は簡単ではない。ところが、その明確な理論と目的をもって実践しているのが、レッジョ・エミリアを初めとするイタリアのいくつかの都市である。本稿はその一つ、トスカーナ州ピストイア市の保育・幼児教育に関する行政と保育所、幼稚園の実践についての研究の一部である。ピストイア市はフィレンツェから遠くない人口およそ9万人の中都市で、旧市街には中世に遡る1000年以上の歴史的建造物がトスカーナ特有の穏やかな丘陵をバックに立ち並んでいる。古くからの住民も多く、三世代家庭や祖父母が近所に住んでいる子どもも多い（ガラルディーニ、2008a）。

ピストイア市当局は子ども政策を市の行政の核の一つとしている。教育と保育における子どもたちの町への参加は、教育政策の主要なテーマの一つである。ここでは、子どもは保育のなかで近隣社会および町とどのような関係を築くかということが焦点の一つになっている。本稿では、ピストイアの保育をめぐる子どもと町の関わり合いという点について分析を行う。分析材料としたのは、保育現場の見学、保育職の働き方と研修の観察、市の保育行政に携わる市の職員および教育保育機関職員への聞き取りの結果、および諸文書である。

2. 保育・幼児教育の場と環境

子どもを社会全体のなかでどう位置づけるかは、言うまでもなく、それぞれの社会・文化が歴史的に構築してきた世界観や価値観に大きく影響されている。その際、子どもに何をするかは問題にされるが、子どもは社会に何ができるか、という視点が語られることは多くない。しかし、ピストイアの保育・教育は、この双方向の視点から子どもと町の関わりを見ている。保育園・幼稚園の施設のなかで保育活動がなされている限り町との関係は間接的だが、保育活動として一歩町に出ると、子どもたちは町と触れ合い、人々と出会う。子どもと町の相互作用から、町が子どもに何ができるか、また逆に子どもが町にどんなインパクトをもたらすか、そして互いの交渉から何が生み出されるのか、が追求されるのである。

3. ピストイアの乳幼児政策とその歴史

イタリアの保育は、全国の制度としては、3歳未満の保育所と3歳～6歳の幼児学校に分かれている。しかし地方分権の強いイタリアでは、各自治体の裁量が大きく、市立の幼児学校、保育所も多い（ムザッティ、2008）。ピストイア市はイタリアのなかでも保育施設に恵まれている。ゼロ歳から3歳児の27%が市立保育園に通い、7%は1日数時間のあるいは週に数日間のサービスに通っている。3歳～6歳の子どもは全員が幼稚園におり、そのうち公立幼稚園にいる子どもが全体の68%である。

ピストイアの乳幼児政策の土台は、1970年代初頭、男女機会均等の動きと女性の社会進出、市民の政治参加の機運、社会サービスへの高い関心等の動きによって生れた。1971年に施行された1044法（保育園設置法）によって、保育所が全国に設置された。この時施設の建築と運営は自治体管轄になり、自治体の大きな裁量を可能にした。ただし、この1044法による保育所設置は、女性の労働参加の条件を促進するために子どもを一時的に預かることを目的とするのであり、子どもの教育には配慮が向けられなかった、という。この法律によってピストイアでも、保育園（Asilo Nido、0～3歳）、幼児学校（Scuola dell'infanzia、3～6歳）がオープ

ンした。北イタリアでは70年代に、レッジョ・エミリア、モデナ、パルマ、ピストイア等の自治体立の保育所間で協働して新しい教育モデルを作る模索が進み、国内と近隣諸国の研究者とも協力して、就学までの子どもの新しい教育の創造が展開された（Galardini,2003）。

ピストイア市は、制度としては国の基準に従って3歳までの保育所と3～6歳の幼児学校に分かれながら、0歳から6歳未満の子どもについての行政を市の教育局のもとに一本化し、就学前の子どもの発達を一貫した理念と方法でトータルに保障するシステムを作った。そして、保育所と幼児学校間の教育理念・教育内容・教育課程についての連続性を作ること、職員の間の協働およびそのための研修に力を注ぐこと、保育所・幼児学校・学校の教育機関のみならず児童館（Aree Bambini）、図書館のような子どものためのサービス制度と施設を創り充実させかつ連携をスムーズにすることを推進した。

0歳～6歳の教育・保育の一貫性は、物理的環境、人、教育内容等の面で具現化された。物理的な側面でいえば、たとえば保育所と幼児学校が隣接した建物か近隣にある、どちらの子どもも保育時間内で園の先生とともに行ける児童館のような施設があるというようなことにみられる。人の一貫性の面では、保育所と幼児学校の職員の共同研修などによる連携が図られている。職員の資格は国の基準に従い保育所は保育職、幼児学校は教師である（ムザッティ,2008）が、それを越えて、互いの連携、協働が保証されている。教育コーディネータ（ペダゴジスタ）が連携を仲介する重要な役割を果たす。保育職と教育職の連携は、理念や教育内容の一貫性を可能にし、0歳から6歳までの一貫した方針のもとに各年齢に即したプログラムが作られている。

4. 「子どもにやさしい町ピストイア」

市当局は1996年に「教育都市、子どもと青少年にやさしい町ピストイア」というプロジェクトを立ち上げた。都市空間のなかで、子どもがいろいろな場所、施設や人々と出会うことができるよう整備し、町の人々が子どもたちを町の一員として大事にするよう促すのが目的で、そのためのさまざまな取り組みが行われてきた。

（1）子どもにやさしい町作りの整備

町の整備やアクセスについてのプロジェクトでは、一人のデザイナー（Andrea Rauch）が描いた絵柄で、「子どもにやさしい町」であることを示すシンボルマーク、子どもにやさしい施設（学校、保育所、公園、体育館、児童館、図書館、プール他）のシンボルマーク、そこに至る歩道のマーク、店頭の「子どもにやさしい店」マークを作った。住民が日常的にマークを見て、町のなかで子どもと家族を意識的に配慮することが期待されている（ピストイア市ホームページ）。

また公共施設のなかには、子どものためのスペースが用意されている。例えば美術館には、作品を見に来るためだけでなく、いつでも遊び、絵本を見られるようなコーナーがあり、アトリエではさまざまな創作活動の指導をする人がある。その他、市はいろいろな企画を子どもを中心に組んでいる。年1回、夏休み中には町の子どもフェスティバルが催される。他にも広場などの公共空間や森などの周囲の自然のなかで、祭りやイベントがある。

(2) 教育憲章

市の教育局は2005年に「教育憲章」を作り、市としての教育方針を明確にした。この趣旨は、「町全体が、生活と文化の場所として、子どものためにあるのであり、彼らの教育のための資源を構成する。そしてあらゆる市民がその責任を負うのである」(Iozzelli, 2007,p.15) ということである。子どもの教育は行政と住民と親の共同の責任という1970年代からの取り組みを、憲章という目に見える形にし、行政と住民を結ぶいろいろなサービスやプロジェクトの基本姿勢を示すものとして利用されている。その骨子は以下の通りである。

原則

- ・ 公平性、多様性、共有性、透明性をもつこと
- ・ 子どもがその発達過程に関わる諸教育機関に一貫性と連続性があること
- ・ 職員の養成、資質の維持向上、自主性、協働を重視すること。
- ・ 子ども期のための教育学を実践すること

「子ども期のための教育学」の方針

- ・ 生活と文化の場である市全体が、子どもに奉仕し、彼らの教育への資産となり。すべての市民が教育に責任をもつ。
- ・ 子どもの教育施設は、それぞれの子どもが自分の成長の機会と資源をみつけることのできる場所である。
- ・ 教育は子どもが世界に意味を付与する自発的な力を培う。
- ・ 教育は子どもの美的感覚を培う。
- ・ 子どもを育てることはそれ自身の特殊性をもっている。
- ・ ピストイアの子どもの教育は、教育者と親の教育的能力の構築、家族の積極的な参加、スタッフの養成と研修、教育「現場」でのドキュメンテーションを通して推進される。

5. 子どもの発達にとって町とは

子どもがアイデンティティを構築していく上で重要な要素の一つは、自分が属している拠所が安定していることである。幼い子どもにとっては、自分の属している家庭が安定したところであることと同様に、自分が生活している町も安定し心地よいことがアイデンティティの基盤の一つとなる。親に愛しなさいと言われて愛着の対象になるのではないのと同様に、町も愛しなさいと教えられて拠り所になるわけではない。

ピストイア市は、子どもたちが町に帰属しているという能動的な感情をもつような子どもサービスを行う決定をした。「町は単なる建物の集合体としてだけでなく、関係性の空間として知覚される。子どもは自分がこの関係性の一部をなしていることを感じている」(Giovannini, 2007, p.20)。「子どもをその個人としてのアイデンティティにおいて『発見』し、それを他者に伝えることは、一般にイメージされる教育機関の社会的活動よりも、さらに踏み込んだ目標である。・・・町に住むことは、ひとつの地域社会の内部にいて、そして共通のアイデンティティを持つ市民であるという文化の内部にいてを意味する」(Iozzelli、2007, p.16)。

すなわち、子どもが自分は地域の人々の社会の真ん中にいて、人々と関わりをもっていることを感じ、自分が町のなかで発見したこと、感動したこと、楽しんだことを人々に伝え、共有

する。それによって、市民として、町と繋がっている自分のアイデンティティを確認できる。この関係性の獲得を教育の重点の一つとして定めたのである。「保育は町に開かれて繋がっていること、つまり町と一体化した保育」（ガラルディーニ、2008 c.p.40）を目指し、「子どもたちに町を贈り物として届けたい」（Giovannini,2007.P.19）のである。

では何を子どもたちに贈れば、子どもたちはピストイアの町をアイデンティティの拠り所とするのか。「贈り物には思想が必要である」（Giovannini,2007.p.19）という。まず、子どもたちには町の空間を知る権利がある。その権利を大人は保障しなければならない。それは、子どもたちが驚いたり、楽しんだり、価値を発見する場所を提供することであり、それによって子どもたちが好奇心に満ちた視線を周囲の世界に向けるのを促すことである。

しかし同時に、「子どもたちの知性を過小評価し、ごまかしの教育で彼らを失望させるのではなく、子どもたちを熱中させ、楽しませ、驚かせ、感動させたいのなら、それは簡単なことではない」（Giovannini、2007.p.19）。ここで言っているのは、大事なことは子どもが本来持っている有能性、深い可能性を見ることであって、ただその場で子どもたちを興奮させるような楽しさ、表面的な表情に迎合することはごまかしだ、ということである。子どもの中に深い感動が喚起されることがアイデンティティ形成に繋がるのである。

より具体的な機会の一つは、町にある文化遺産や芸術と接触することである。「何よりもまず、子どもたちは町の芸術的・歴史的・建築的文化の優れた享受者としての可能性を秘めているのだという信頼が肝要である。」「そしてそのことで町の文化遺産を知り、それらの場所が自分たちを迎え入れ、驚かせることのできるよい場所であると思えるようになることである」（Giovannini,2007. P. 20）。そのために、文化遺産をめぐりながら、そこにまつわる神話、言い伝え、物語を知る。あるいは、この地方の文化の伝統であるおとぎ話、物語、寓話を実際にお年寄りに語ってもらう（Galardini & Giovannini,2001）。

確かにピストイアは文化的遺産に満ち、芸術を育んできた町であり、また古い遺産だけでなく新しい芸術を生み出している。しかしこれは歴史の恩恵を受けているピストイアだけができることだろうか。どの町にも町の美しい財産があり、それを掘り起こし、あるいは目を向け、大切にしていることが大人から子どもへの贈り物であろう。

このような子どもと町の間接関係を大人はどのようにして提供できるか。市役所の子どもための部課の管理委員会は、2004年に「子どもたちと町」を市のテーマの一つに掲げた。

大人（親と教師）の仕事は、子どもに歴史をもったコミュニティへの帰属感覚を伝えることだが、「町は、探索し、さわり、描写し、記憶し、はたらきかけるための特別な機会として提示された。子どもたちは町を、関係性の空間として、『さまざまな場所のある場所』として描くことで、生きている日常の中に町を発見するよういざなわれたのであった」（Iozzelli, 2007. p.16）。しかも、これはまた、子どもの発達や学習のプロセスを、幼稚園や保育所のなかだけでなく、子どもたちの周りの事実や経験のなかでつくり上げていく実践活動でもあった。

6. 町にとって子どもとは

町にとって子どもとは何か、もまた問いかけられた。「一人の子どもを共有することは、倫理的・市民的責任であり、子どもという主体が表現するものや、なろうとするものを認識する

ために、大人たちが引き受けねばならないことである」(Iozzelli,2007.p. 15)。

町は、子どもを周延的な位置に置くのではなく、保護する対象とだけ見るのでもない。主体をもった人、社会のなかでその権利をもった人間と考える。公共の施設は、家庭の機能と平行して、子どもが遊ぶ権利、友達をもつ権利、認知的・情緒的・社会的な力を発達させる権利を尊重しながら、サービスを作らねばならない。大人の都合で町を子どもにとって生きにくくすることは子どもの権利を踏みにじることである。車を締め出した旧市街の道筋で子どもがボール遊びや石けりに興じているのは、また町の広場で乳母車のなかの赤ちゃんがのんびりと日向ぼっこをする両親の傍らで眠っているのは、このような権利に守られているからである。

保育活動のなかで、子どもたちはよく町に出る。町にとってこれは、「子どもたちはそこで、自分たちの町への視線を提供する。それは驚きに満ちた視線であり、楽しみに満ちた視線であり、私たちが馴染んでいながらも私たちの目には興味も価値も失われているような場所に新たなアイデンティティを与えるものである。そうした空間を知る権利は守られなければならないのである」(Galardini,2007,p.13)。大人にとって長年見慣れたものが、子どもにとっては新鮮であり、大人の固定した見方に対して子どもたちは新しい発見をする。「子どもたちの潜在的な表現力、そして子どもたちが町の中での私たちの関係の社会性に与える豊かさを気づかせてくれるのである。このように、町が子どもたちにとっての資源となるだけではない。子どもたちも町にとっての資源となるのである。」「子どもたちの感受性豊かなまなざしと、大人たちの積極的な参加とは、居住空間についてさまざまなイメージや解釈を生み出し、すべての人々に開かれた探索の方向性の可能性を打ち出したのである」(Iozzelli,2007.p.16)。

子どもは町に豊かさを気づかせてくれる貴重な資源である。そうであるならば、町に出る子どもたちが何を発見するか、どんな表現をするか、大人たちは興味津々であるに違いない。

7. 町の美に接する

ピストイアの幼稚園、保育所、児童館は、施設設備、教材、提示のレイアウト、ドキュメンテーション等、隅々まで美的な感覚に満ちているのも特徴であり、それは保育の重要な要素となっている。それは装飾としての美ではなく、それぞれ機能をもった美である。たとえば、壁のドキュメンテーションのポスターは写真や絵と文字で美的に構成されているが、メッセージを正しく伝えるには美的に表現されることが必要だという考え方に立つ。そこには「子どもたちは美への権利をもっている」という理念がある。これによれば、保育の場が美しいということそれ自体が、子どもたちの発達を促す。それは、美しい場所にいると子どもは居心地がよくリラックスし、長居するようになる。美しい場所に常にいると、他者と交流したくなり、思いやりの心も育つ。探索したい気持ちも起こる。物を大事にしようという心も自然に芽生えてくる。美的センスを養うということは、深い関係性の世界、社会でどのような生き方をするかということまでに至るからである、という(ガラルディーニ, 2008a)。

美は保育・教育施設の内に止まってははいない。子どもたちは保育活動として、町にある芸術を訪ねて巡り、驚きや感動を味わうことができる。美術館で作品を見る、触る、歴史的な遺産を巡る、現代アートで遊ぶ。さまざまな作品との出会いが子どもたちの想像力を掻き立て、それを表現したくならせる。勿論ただ子どもに芸術作品を見せただけで、美の感覚が育つわけ

はない。美への意識を高めるために、子どもたちにはどういう形で経験すべきか、どんな準備が必要かを教師や保育者は省察しなければならない。またそのための周知なプログラムが作られなければならない。

8. 実践の試み：町を探索する

教育・文化担当議員によって推進される市の行政プロジェクトとして、2003年春に始動したプリミツィエ（「最初の果実」）の活動は、多様な人々の参加によって動いてきた（Giovannini, 2007, p.19）。

これは、子どもたちが街並み、通り、歴史的建造物を探索するように、また地域の文化遺産の一部をなす物語や逸話を知り発見できるように、学校・幼稚園・保育所が仲立ちをする試みである。そこから生まれた一つが、多くの保育所と児童館の一つ Aree Blu のアトリエが参加した「ひとつの広場、ひとつの物語」というプロジェクトであった。

このプロジェクトは3つの段階から成る。まず、町に出る前の段階である。学校・幼稚園・保育所で、子どもたちは町について考え、どんな印象をもっているかを話し合う。自分の家や自分の学校を通して、またはいつも遊ぶ公園や友だちの家のある通りでの出会いや友情といった個人的経験を通して、子どもたちは帰属する場、関係の場としての町をもっている。これらに対して子どもたちがどんなイメージをもっているかを話し合いのなかで浮かび上らせる。大人が子どものもっているイメージをつかむだけでなく、子どもたち自身が生活のなかで普段持っている自分のイメージを明確にする。

第二段階は、町の訪問である。どこをどの順に訪問するか、まず子どもたちの希望からスタートした。もっとも重要な場として選ばれたのは広場である。広場は人々の出会いの場であり、共に心地よく過ごせる場であるから、そして子どもたちがくつろぎ、楽しく遊ぶことのできる場所だからである。子どもたちは小グループで行動した。何度も歩きまわり、探索し、注意深く、好奇心と驚きをもって何が発見できるか、見たり触ったりしてまわった。そこで遊び、自然に絵を描くことを思い立った。また町の人々と話したり、語ってもらったりしながら、いろいろなことばや情報を集めた。

第三段階は園・学校に戻ってからである。彼らの経験の記憶とイメージの美的感受性を刺激するように、また彼らが出会った文化的遺産や芸術作品に近づきたいと思うように、環境が整えられた。たとえば学校では、子どもが手に取れるところに、絵、本、写真、パンフレット、ハガキ、スライドが置かれ、彼らが表現方法を工夫したりヒントを得るための誘発剤となった。描く道具となる素材はいつも子どもの手の届くところに配置された。学校やアトリエではデッサンや絵を描いて、記憶や経験した感情を呼び起こした。表現やコミュニケーションの様々な可能性を発見できるよう、十分な時間が与えられた。このことは、子どもたちが自分の美的・創造的スタイルを模索することを支え、促進した。子どもたち一人ひとりが、独自のすぐそれとわかるスタイルで、形や色や空間を用いたのだった。また子どもたちが口にしたことばは録音され、あるいは教師が書き取った。子ども同士の会話、教師との会話も記録された（Giacomelli & Palandri, 2007）。

Per Mano の記録（2007）から、子どものことばを拾ってみよう。大人が見慣れ興味も価

値も失われているような場所に新たなアイデンティティを与える子どもの視点がはっきり見られる。物理的にも、大人より低い子どもの視点と視野は、町への新しい風景を示している。

「広場から上を眺めると、お空がたくさん見えるよ。なぜって広場は大きくて、四角いから。でも真四角じゃなくて、ときどきちょっと丸く見えたりもする。」〈pp.29〉

「ピストイアは色とりどり。木と芝生があるから緑色だし、地面があるから茶色だし、屋根があるから赤いし、煙突があるから黒いし、岩とか石があるから灰色。」〈pp.29〉

「高くてせまい階段を上がって、鐘つき塔に登ったよ。てっぺんには鐘があって、ちょっと寒くて、下を見ると、頭がくらくらするの。ドゥオーモ広場と、町全部と、山が見えるよ。そこから覗くと、ドゥオーモの上の聖ヤコボの銅像が見えるけど、そこからはもっと大きく見えるんだ。」〈pp.39〉

「門の近くに、詩が刻んである。それは僕たちが腕を広げたくらい長いんだ。市役所の壁の長さをはかったよ。17人のこどもが腕を広げた分ある。門は2人半。」(pp.45)

表面的に見れば、園で予習をして町に出て見て歩き、それを絵に描きことばにする、という、平凡な活動である。これなら特別のことではなくどこでもやっている、と思われることである。しかし、そのプロセスの一つ一つがどんな理念と目的で作られ、どのような構成がどのような材料をもってなされるか。そこにどれだけの大人の思いが一つになり、どれだけの町の人々がそれを見守り子どもと関わるのか。その結果一人一人の子どものなかに何が生み出されるのか。これらに多大な配慮が払われ、そこから子どもの創造的な表現が生み出された。それは偶然的にではなく、繰り返し可能な形で具現化できるような組織化によって生み出されたものだった。この活動は、保育所の2歳児、幼稚園児、学童の間に一貫性をもって、かつそれぞれの発達段階に合わせて、計画され実行された。

9. 市の職員の職場環境と研修

ピストイア市は、市立の保育所・幼児学校・児童館の教師・保育者の専門性とチームとしての仕事の能力を高めるために相当額の予算が投入され、大きなエネルギーが注がれてきた。特に、ユニークな働き方と、質の高い現職研修は注目される。

(1) 職場での合議制と教育コーディネータの役割

幼稚園、保育所には園長がいらない。誰かが他の職員に指示することはなく、すべて合議制である。また事務的な仕事もなく、職員は保育に専念できる。代わりに、市役所にいる教育コーディネータ(ペダゴジスタ)がいる。コーディネータは一人が8-10の園を受け持ち、各園での事務的なことについての役所との連絡、それぞれの園で起こる問題解決の仲介あるいは援助、職員会議での調整、また幼稚園間、保育所間の調整、保育所-幼児学校-学校の連携を行う。地域の他のいろいろな機関との連携もコーディネータの仕事である。このように潤滑油のような役目を果たす人がいることで、各園の職員は安心して自分の仕事に打ち込むことができる。話し合いは十分時間をかけて行われ、そのような時間を取れるだけの余裕をもった勤務体制になっている (Galardini, 2008 b)。

(2) 在職研修

研修も大事な仕事の一部である。たとえば、保育所の職員は週20時間、子どもと接せず自己研修を行う時間を保証されている。自己研修の他、職場研修、職場外研修を通して、保育者は自分のテーマや関心事について深めていくことができる。研鑽を積むにしたがって、その分野のスペシャリストになっていく。

保育者たちが高い専門的能力を培うのを可能にしているのは在職研修の方法である。Galardini (2001、パリ市庁での講演録、私信)によれば、ピストイアの在職研修モデルが軸としているのは、継続性と集団指導性ということである。

継続性というのは、在職研修は保育・教育実践と平行して行うべきで、日常生活のなかで常に継続すべきものという意味である。それぞれの施設で重要なときにグループで行う、つまり固定化されたメンバーが組織的な研究プロジェクトを行うなかで、サービス全体を見直し改良していくべきである。

一方、集団指導性というのは、日常の活動についての個人の自己研修を超えたところに位置づけられる。一つあるいは複数の園の教師集団がプログラムを作り追求していく研修で、二つの方向がある。第一は、一人ひとりの質を価値づけながら、その力を発展させることである。個人の知的なエネルギーにとりわけ価値を置き、それぞれの保育者が、興味関心をもった領域を最大限に学ぶことができるのである。美術が趣味、自然が好き、本が好き、などの個々の教師の、関心を貴重な資源と考える。そして、専門性の表現としてその関心を発展させていき、子どもが美術、科学、本に対する好奇心をもつことに配慮できるような方向で研修を受ける。このように教師の個人的な適性の尊重から、保育実践の新しい考えが生まれる (Galardini & Giovannini, 2001)。実際、ピストイアの保育所や幼児学校には、美術、物語、本、科学等の分野の高度なスペシャリストがいる。しかし同時に彼らは保育者である。専門家としてではなく保育者として子どもに接し教える。たとえば、子どもたちにアート活動を提供する児童館 AreeBlu の A さんはすばらしいアイディアをたくさんもって、子どもたちの創造的な活動を引き出しているが、もともと絵を描くのが好きな保育士だった。好きなことを学べる研修システムで腕を磨き、一定の年限の勤務のあと、児童館が創設されて移り、乳幼児と学童がアートを通して創造する楽しみを発揮できる児童館を作ってきたのだという。また「おとぎ話」という名の幼児学校の教師 G さんは、幼児学校現職研修で好きな本と物語の探求を進め、学校全体を物語の主人公たちが生きているかのような想像とことばの溢れた場にしている。この地方の伝統である「語り」の文化を子どもたちに伝える活動に触発されて、学校のなかで物語りの実践を行い、そこから発展して本の専門家として、他の幼児学校や保育所での指導もする (Edwards & Gandini, 2008)。行政の側にいる教育コーディネータの D さんもまたかつて保育者であった人で、その経験があるからこそ、ごく身近に子どもたちと対話しながら、学校や保育園の現実に的確に対応でき、教師の間の協働を援助していくこともできるのである。

第二は、大学や研究者と協働で、現場のプロジェクトを支える実践研究をしていることである。ここに参加する専門家はサービスに実際に直接関わり、その現実を熟知した上で専門的能力を提供する。実際、ローマの国立研究所の研究者たちが長年に渡って実践研究に参加している。

保育者・教師が働く上のモチベーションを重視していることも、ピストイアの保育の質の高さに大きく寄与している。何よりも職員が生き生きと、自律的に、その個性と創造性を十分発揮して保育・教育ができる職場がある。教師・保育者が楽しく工夫をこらした環境を作っており、子どもに提供しており、目を輝かせて子どもに語っている。それを互いに同僚が支え合っている。管理の目を光らせている人はいない。評価は互いを高めるための自己評価であり、話し合いのなかで協力し合って問題を解決するためにある。ここで仕事を続けたいと思えば、ずっと同じ職場にいられ、配置転換は希望しない限りない。職員間のずれや問題があれば、コーディネータを交え徹底的に話し合うという。悪い可能性や弊害の方を先に考えることはしない。人は最小の管理のもとで自発性を発揮できれば、そしてその能力を高める機会があれば、すばらしい創造性を発揮でき、それを子どもたちに伝えることができる、これこそが教育なのだという哲学が共有され、それを教師・保育者は体現し力を発揮している。その根底には、人間性への大きな信頼がある、と覚えてならない。

結語. 社会と子ども

現在の世界情勢のなかで、就学前の子どもたちに対する教育の重要性の認識は一層強まっている。2006年に出された OECD の 6 歳までの子どもの教育についての報告書 *Starting StrongII* は、子どもは社会の公共財であり、未来の社会を担う乳幼児の教育に大きな投資をすべきだと主張している。しかしここで示されている子ども像は、経済を担う未来の労働力ではない。子ども期の現在を将来のために我慢し、テクノクラートを目指して競争に追い立てられる存在でもない。すべての人がウェルビーイングを追求できる社会、すべての人がその能力を発揮し周辺化することなく生きていける社会を将来担うべき存在という像である。恵まれない環境にいる子どもたちも含めすべての人が人間らしく生活することを保障される社会、生まれつき有能で可能性をもった人間という存在が人生を通じて継続して学んでいける社会において、乳幼児期の教育はこれまでになく重要になる、と主張しているのである。そのために、トータルな人間としてのホリスティックな発達を促す教育が推奨されている。ピストイア市の教育はまさにこのような子どもを町として教育しようとしているのである。

おそらく北イタリアの共通の伝統のなかで築かれた人間観、発達観、世界観の上に、この地域の人々が作りあげてきた子ども観が基礎となっているのだろう。ピストイアの保育・教育には特別な指導者がいるわけでもなく、またある特定の理論に基づいているのでもない。まさに町の人々、行政、現場職員、親、住民が協働で作ってあげてきたものであろう。 レッジョ・エミリアのローリス・マラグッツイの次のことばはそのままピストイアにも生きていえると言えよう。「町は歴史と生活が複雑に交錯する場であり、変化し続ける場であるのです。そして、子どもたちとも絶えず会話を続けているのです。それは難しい言語からなる会話で、町を構成するさまざまな世界を行き交い、子どもたちが成長するために幼くして理解せねばならぬ会話であり、自分たちの存在に必要なものや権利とともに、その空間や方角に対する感覚、情報や知識を判断するために学ばねばならぬ会話なのです」(レッジョ・チルドレン, 2001. p. 78)。

引用文献

Baudelot, O. & Musatti, T. (2002) Politiques municipales aujourd'hui ; les coordinateurs de la petite enfance, une comparaison France-Italie. Politiques d'éducation et de formation, 6, 71-84.

Brougère, G. & Vandenbroeck, M. (2007) Repenser l'éducation des jeunes enfants. P.I.E. Peter Lang, Bruxelles, Belgique. P.288.

Bronfenbrenner, U. (1979) The Ecology of Human Development Experiments. Harvard Univ. Press. Cambridge.

Commune di Pistoia. (2007) Per Mano. Editione Gli Ori, Pistoia, Italia. p.102.

Edwards, C.P. & Gandini, L. Filastroca Preschool in Pistoia, Italy: Promoting Early Literacy through Books and the Imagination: A Conversation with Alga Giacomelli. (2008). Child, Youth and Family Studies, Department of Faculty Publications, Department of Child, Youth, and Family Studies. University of Nebraska. Lincoln, Nebraska, 1-11.

Galardini, A.L. (2003). L'asilo nido nell'esperienza italiana. in Galardini, A.L. (ed.) Crescere al nido. Gli spazi, i tempo, le attività, le relazioni, Roma, Carocci. 18-28.

Galardini, A.L. (2007) La città che parla. In Commune di Pistoia Per Mano. Editione Gli Ori, Pistoia, Italia. 13-14.

ガラルディーニ、A.L. (2008 a). ピストイア市の保育サービスネットワーク。日本保育学会60回大会資料集。日本保育学会第60回大会準備委員会企画事業報告集、17-25。

Galardini, A.L. (2008 b) Etre pedagoga en Italie. *Enfant d'Europe*. 15. 16-17.

ガラルディーニ、A.L. ピストイア市の保育・幼児教育 (2008 c)。星三和子、上垣内伸子。イタリア、ピストイア市の保育・幼児教育とドキュメンテーション。十文字学園女子大学共同研究報告書。40-45。

Galardini, A. & Giovannini, D. (2001). Pistoia; Creating a Dynamic, Open System to Serve Children, Families and Community. Gandini, L. & Edwards, C.P. (eds.) *Bambini; The Italian Approach to Infant/Toddler Care*. 89-105. Teachers' College Press, Columbia University. New York. P.237.

Giacomelli, A & Palandri, A. (2007) Rappresentare la città. in Commune di Pistoia (2007). Per Mano. Editione Gli Ori, Pistoia, Italia 21-23.

Giovannini, D. (2007) Primitie; occasioni per conoscere la citta. in Comune di Pistoia Per Mano. Editione Gli Ori, Pistoia, Italia.19-20.

Iozzelli, S. (2004) Children in Community. Education in Pistoia. Edition Junior,11- 13

Iozzelli, S. (2007). Partecipare la citta,partecipare l'educazione. in Comune di Pistoia (2007). Per Mano. Editione Gli Ori, Pistoia, Italia. 15-18.

ムザッティ、T. (2008) イタリアの幼児教育と保育サービス。日本保育学会60会大会資料集。日本保育学会第60回大会準備委員会企画事業報告集、26-31。

OECE (2006) Starting Strong II. OECD.

レッジョ・チルドレン (2001) 子どもたちの100の言葉。田辺敬子他訳。学習研究社。p.214.

Super ,C.M. & Harkness, S. (1986) The developmental Niche: A Conceptualization at the Interface of Child and Culture. International Journal of Behavioral Development,9,4.545-569.

註

本研究は、平成19年度、20年度十文字学園女子大学人間生活学部共同研究の助成を受けた。なお、イタリア語文献の翻訳には、東京外国語大学大学院生中田俊介氏のご協力を得た。

謝 辞

聞きとりと見学を許可し協力して下さったピストイア市役所および保育・幼児教育現場の方々に深く御礼申し上げる。

Summary:

This study aims to reflect on the role of the city in children's education, development and well-being through an example of the "child-friendly city" of Pistoia , Italy. The municipality of Pistoia has policies that value the urban environment in which its children live and develop their potentialities. Analysis was made of the following aspects of the relationship between early childhood education and the city; practices of early childhood education and care in relation to the urban environment, child-friendly provisions in the city, efforts by teachers to ensure children their identities as citizens of Pistoia, and working systems of teachers and municipal employees in public services to support children's development.